

今週は、曹洞宗の開祖道元禅師の著された「正法眼蔵」についてお話しいたします。

「正法眼蔵」は、仏教書というより哲学書という認識をされている方が多いようです。それは多くの学者が、難解であるが故にそのような表現をされたからでしょうが、間違いなく「正法眼蔵」は、曹洞宗を開いた道元禅師の教えであり、曹洞宗の根幹をなす重要な経典です。

「正法眼蔵」は、全部で九十五巻あります。

一二二七年、道元禅師が中国より帰国しました。それから数年後の三十四歳の頃、京都宇治の興聖寺で「摩訶般若波羅蜜」の巻を著わしてから、四十数巻を完成させ、その後、福井の永平寺などで四十数巻を書かれたのでした。

一二五三年、死の直前の五十四歳の時に、永平寺で九十五巻目となる「八大人覺」の巻を著し、二十五年間にわたって書き続けた最後の著作となりました。

弟子である懐辨禅師の書き残されたものによると、道元禅師は亡くなる数年前より、今までの巻をすべて見直し、正法眼蔵を百巻にまとめようと計画されていましたが、志半ばで生涯を閉じられたのでした。

道元禅師が開かれた曹洞宗の特色は、現実の生活実践に重きをおいて、行住坐臥における綿密な作法にあります。

ですから「正法眼蔵」の内容も、修行僧を教え導くための説法だけでなく、洗面・歯磨き・爪の切り方など修行僧の生活の事細かなことまで示されています。

それは、読経や坐禅だけが修行ではなく、現実の生活実践そのものがすべて修行であると説かれているのです。

「正法眼蔵」という題名の意味は、「仏の正しい教えの眼目を収めている蔵」ということです。道元禅師によって、お釈迦さまより代々伝えられた正しい教えが記されています。

現実の生活実践すべてが修行であり、仏の道につながることを道元禅師は確信をもって説かれているのです。

お釈迦さまから正しく伝えられた仏法である、道元禅師の「正法眼蔵」に、是非触れて頂きたいと願うばかりです。